

脱構築はいかにして手紙を盗むか ——デリダにおける精神分析批判の方法——¹

工藤 顕太

はじめに

本稿は、ジャック・デリダの「真理の配達人」²を取り上げその分析を試みる。このテキストでデリダは、ジャック・ラカンが自身のセミナーをもとに書き起こしたテキスト『盗まれた手紙』についてのセミナー³を批判的に読解している。したがって、「真理の配達人」を読解することは、デリダとともにラカンを読解することでもある。デリダはそこで、精神分析のテキストと文学のテキストの特異な交錯を暴き出しながら、言説、テキスト、レトリック、真理とフィクション、法、権力、セクシュアリティ等々、多岐にわたる論題を提起している。本稿は、「真理の配達人」を読解し、そこでなされている議論のポイントを明確化しながら、その射程を明らかにすることを試みる。

上で列举した問題群は、デリダの批判において、ある論点を介して相互に緊密に結びついている。それは、ラカンが(「セミナー」における言説に限らず)その理論の中心的な概念装置として用いている〈シニフィアン(signifiant)〉の特権性である。ラカンは「セミナー」において、エドガー・アラン・ポーの短編小説『盗まれた手紙(*The Purloined Letter*)』(1844年)を自らの精神分析理論に引きつけながら独自の分析を行なっている。ここでのラカンの分析によれば、この小説が描くのは、特権的な〈シニフィアン〉としての手紙が、登場人物たちの間を絶えず移動しながら、彼らの欲望を起動し絡め取ってゆく物語である。

そうしたラカンの言説において、〈シニフィアン=手紙〉は、真理とフィクションの錯綜関係を巧妙にくぐり抜けながら、象徴界の法を措定し、性別化の体制を布き、超越論的な特権を保持しているのではないか。この問いが、デリダをラカンのシニフィアン概念の脱構築へと向かわせている。そしてその脱構築

の帰結として、デリダはラカン的なシニフィアンに〈散種(dissémination)〉を対置するに至る。この議論を辿り直すことで、デリダ、フロイト、ラカンのテキストにおいて、一体何がなされているのか、その（三者のテキストの）実践の相を可能な限り具体的に描き出すことが、本稿のねらいである。脱構築と精神分析という二つの特異な振る舞い、その緊張関係は、まさしくその実践のレベルにおいて、思考されるべきものである。

1. フロイトにおける文学と精神分析の関係

まず、「真理の配達人」の議論の枠組みを提示するために、デリダによるフロイトへの批判を要約して示すことから始めたいと思う。精神分析はどこにあるのか、あるいは精神分析とテキストとの関係はいかなるものなのか？これが、デリダがこの論考で提起する根本的な問題である。この問題提起は、テキストにおける精神分析の視点の位置、眼差しの場に関する疑義であると言える。とりわけここで主題とされるのは、精神分析が文学テキストをいかなる位置から読み、分析し、文学テキストをどのようにして利用するのか、ということである。より具体的に言えば、「真理の配達人」におけるデリダは、フロイトとラカンが自身の精神分析理論を展開する言説の中で、文学テキストを参照するその仕方を問題視している。デリダの考えによれば、フロイト＝ラカンの言説において、文学テキストはときに（フロイト＝ラカンが考える限りでの）真理を覆い隠す仮象として位置づけられ、またときには、真理の例示として、あるいはその証拠として持ち出される。こうした矛盾を含んだ関係、テキストにおける精神分析、文学、さらには真理の交錯した位置関係こそが、デリダがここで脱構築を企てる標的なのである。

精神分析は「限定された(déterminé)」仕方で文学テキストを分析し、そこから決定された(déterminé)ものとして真理を引き出しもする⁴。ある文学作品についての真理、テキストというものについての真理、真理というものについての真理。精神分析の真理とはどこにあるものなのだろうか？あるいは真理を扱うとき、精神分析はどこに位置しているのだろうか？この一見奇妙な問いに対し、デリダは複数のテキストの関係、テキストという場における別のテキストの位

置を標定することから議論を開始する。通常ある分析対象としてのテキストとそれを分析する別のテキストとの位置関係は、両者が相互の外部にありながらも、後者が前者を(引用、読解という形で)取り込み、内部に位置付けるものと考えられる。しかし精神分析的読解においては、こうした素朴な位置関係は成立せず、むしろ分析する側の(つまりフロイト＝ラカンの)テキストの少なくとも一部は、分析対象である(文学フィクションとしての)テキストの内部に位置付けられているのである。精神分析的読解は対象となるテキストから真理を引き出す。そして引き出された真理(文学フィクションの内部にすでに含まれていたものとしての真理)には、当の読解の過程が、つまり当の真理が引き出されるその仕方までもが書き込まれているのである。

この意味で、精神分析が開示してみせるこの真理は一つの言説、真理についての言説、真理についての真理だということになる。換言すれば、精神分析は文学テキストを、精神分析が文学テキストを読む仕方が書き込まれたテキストとして、あるいはそのような真理を隠蔽しているテキストとして読むのである。だから「真理を扱うとき、精神分析はどこに位置しているのか」という上の問いに立ち返るならば、その答えはこうである。精神分析は分析対象の内部と外部に同時に存在している、真理を携えながら、そして同時に、自らを真理として証し立てながら。

ここからは、文学作品が精神分析にとっての真理を隠蔽するものとして位置づけられている例と、それとは逆に、真理を根拠づけるものとして位置づけられている例を、順にみていくことにする。

フロイトにおいて真理とその隠蔽という対比関係が見出される例として、デリダが取り上げるのは、『夢解釈』における「夢の作業」に関する議論である。フロイトによれば、私たちが一般に夢と呼んでいるものは、「夢の潜在思考(latente Traumgedanken)」が加工されて出来た生成物(「夢の顕在内容(manifesten Trauminhalt)」)である。「夢の作業」とはこの加工のことであり、それは無意識の活動を基礎づける文法のようなものである。夢解釈とはこの意味で、夢の顕在内容を無意識に特有の文法に従って夢の潜在内容へと翻訳しなおす作業であるといえる⁵。

フロイトは『夢解釈』において、個々の夢の差異を越えた共通のモチーフが典

型的に表れている夢である「類型夢」という概念を提示する。「類型夢」の意味の核はフロイトにとってある普遍性を持っており、いくつかの類型があるもののそれらはいずれも幼年期の体験の変奏として考えられている⁶。このような普遍性の次元を措定することで、フロイトは夢の理論に根本的な区分を導入している。それは真理として剥き出しにされた意味の核を構成する夢の「原材料 (Stoff, matériel)」と、そうした真理を隠蔽する諸要素、すなわち夢の「二次的加工 (sekundären Bearbeitung, élaboration secondaire)」に属するものとの区分である⁷。こうした区分のもとで、顕在内容は潜在思考を「隠蔽する (verbergen)」ものとして捉えられ、夢の分析はそれを顕在内容によって覆いをかけられた潜在思考を「発見する (entdecken)」ものとされる。

このようなフロイトにおける一次的内容(真理)と二次的加工(隠蔽)の区分は、精神分析のテキストにおける文学テキスト位置付けにも重大な帰結をもたらすものであるとデリダは考える。なぜなら、フロイトは『オイディプス王』、『ハムレット』を分析し、そこから引き出される一次的内容、つまり母親との近親相姦と父殺しという剥き出しの真理を構成しないあらゆる要素を、二次加工の側に還元するからである。この規則に従えば、これらの作品から人々が引き出す様々な物語・モチーフ(例えば運命の悲劇、人間と神々との葛藤、神学的なドラマなど)は二次的なもの、真理を隠蔽するものの側に属することになる。

デリダは、フロイトによるこうした文学読解における「裸形化 (Ausziehen, la mise à nu)」・「裸形性 (Nacktheit, nudité)」を、根本的な特性として指摘する。それは精神分析における真理を、さらには真理の開示のプロセスを示す特性である。さらに、デリダはこうした精神分析の振る舞いと、フロイトが挙げる「類型夢」の一例を重ね合わせることで、フロイト的な真理の在り方を脱構築する。

ここで引き合いに出されるのは、「類型夢」の一つとしてフロイトが挙げている「裸体露出 (Nacktheit)」の夢である。これは、夢の中で裸のまま公衆の面前にいる自分を見出して困惑する、というものである。フロイトは、「裸体露出」の夢の意味の核となっているのは、裸体である者が感じる「羞恥 (Scham)」である、としている。ここでの羞恥は、在るべきものの不在に起因する居心地の悪さ、と言い換えることができるだろう。露出とはまずもってそこに在るべき覆いや、隠蔽するヴェール (voile) の不在、すなわち暴露 (dévoilement) である。そしてこ

れに、さらに重要な要素である別の不在が重ね合わされる。裸体の者の羞恥を駆り立てるのは、自らの裸体を見ているはずの他者たちが、まるでそんなものは見ていないかのように振舞っていることなのである。つまりこれは、裸体を裸体として認める他者の在るべき反応の不在であり、それによって、裸体の者があたかも服を着ているかのように扱われているということである。

重ね合わされたこれら二つの不在が織り成す矛盾に、フロイトはこの夢の意味の核である羞恥の原因をみているのである。そしてフロイトはこの矛盾を、文学を「証拠」に立てながら説明するのである。これが、フロイトにおいて、文学作品が精神分析の真理を根拠づけるものとして位置づけられている例である。ここで引き合いだされるのは、ハンス・クリスチャン・アンデルセンの童話『皇帝の新しい着物 (*Kejsereens nye klæder*)』(1837年)である。この作品は、日本では『裸の王様』として知られている。

この童話には、次々と無理難題を押しつけては人々を困らせる皇帝が登場する。ある日皇帝は、新しい着物が欲しいと言い出す。そこで二人組の仕立屋が登場する。この仕立屋は、愚鈍な者や自分に相応しくない仕事をしている者には目に見えないが(つまり有能な者、自分に相応しい仕事をしている者の目には見える)、着ていてわからないほど着心地が良い生地を持っているという。皇帝はこの生地で作った服を仕立てるが、完成品を見せられたとき、皇帝の目にはこの着物が見えない。しかし皇帝にとっては、「見えない」と言うことは、自分が皇帝に相応しくない愚か者であることを告白することに等しいため、それはできない。それゆえ皇帝は、さも着物が見えるかのように振舞ってそれを褒め称える。家臣や街で皇帝に出会った人々も、皇帝と全く同じことを考え、皇帝が何も身にまわっていないように見えても、決してそのことを口に出すことができない。しかし実際には、この生地そのものが仕立屋たちの嘘であり、そんなものはそもそも存在しない。登場人物たちはこの嘘に騙されて、皇帝が本当は裸であるにもかかわらず、誰もそれに対する反応を示さないのである。この物語では、子どもが最後に、皇帝が裸であることを公然と叫ぶ。

アンデルセンが描くこのような光景が、上で述べたフロイトの「類型夢」、すなわち「裸体露出」の夢の状況ときわめて似ていることは明らかだろう。フロイトはこの近似性ゆえに、「裸体露出」の夢における矛盾(あるべき衣服が不在であ

るにもかかわらず、その不在を指摘する反応もまた不在である)の「証拠」として、『皇帝の新しい着物』を援用するのである。しかし、フロイトはここでも、一次的内容(真理)／二次的加工(隠蔽)という区別を用いている。フロイトは、アンデルセンの描く物語は、裸であるものの羞恥、という精神分析が見出す真理に、「外装を施すもの(Einkleidung)」だと言うのである。つまり、この物語はフロイトにとって真理の証拠として持ち出されるが、それはやはり真理をありのまま示すものではなく、真理に覆いをかける「外装」としてなのである。作中の着物は、この羞恥の原因である矛盾を体現する形象に他ならない。それは愚かな皇帝の裸形(それは文字通り剥き出しの身体であると同時に皇帝の無能でもある)を剥き出しにする装置としての覆いである。重要なのは、ここに、真理と文学フィクションの関係と、それと相似形をなす衣服の形象との、捻じれた入れ子構造が見出されることである。

デリダの考えによれば、裸形を覆うことで剥き出しにする装置を作動させる矛盾は、精神分析が孕んでいる(そしてそれに多くを負っている)矛盾でもある。そしてそれはフロイトの文学テキストに対する二重の態度とも連動している。フロイトが導入している一次的内容／二次的加工という区分に従えば、童話である『皇帝の新しい着物』の物語(récit)は後者に属するものである。フロイトはそれを援用しながら、「類型夢」にかんする真理を、つまり「裸体露出」の夢の意味の核を説明する。その説明によれば、その核心は真理における裸形性が孕んでいる矛盾そのものであり、アンデルセンの物語における衣服という形象はこの矛盾を体現している。デリダがここで暴き出すのは、フロイトにおいてひそやかに起きている文学テキストの位置付けの転換である。裸形＝真理とその覆いが矛盾というかたちで結び合わされている、という「類型夢」についての真理が、真理を隠蔽している側に位置づけられるはずの文学テキストにおいてそのものとして裸形性・裸形化である衣服として現れるとき、真理(一次的内容)を隠蔽するはずの文学テキストは一次的内容そのものになってしまっている。つまりここで、フロイトが設けた一次的内容(真理)／二次的加工(隠蔽)という区分はそこから展開されるフロイトの言説そのものによって、裏切られてしまっているのである⁸。

このような転換が暴き出される場、つまりデリダがフロイト的な真理を脱構

築する場は、語のレベルにまで分割されたテキストの表面にある。フロイトは、上の区分において一次的内容を示す概念である「原材料」に‘Stoff’ という語を当てているが、この語には「布地(étouffe)」・「織物(tissu)」といった意味も含まれる。また、「二次的加工」の系を示すのに用いられる‘Einkleidung’ という語は「服(Kleidung)を着せる」という意味の動詞‘einkleiden’名詞化したもので、「外装」、「仮装」といった意味が流れ込む⁹。これらの意味が差し出す衣服の形象と、物語の中の衣服との一致、さらにそれを剥ぎ取られて現れる裸形性の「原材料」＝「織物」への連関は、決して無視できるものではない。なぜなら、こうした語彙上の連関は、精神分析にとっての真理と、それを隠蔽するものとの一体性をも示唆するものだからである。この一体性は、精神分析的読解における、分析者＝読解する(déchiffrant)テキスト／被分析者＝読解される(déchiffré)テキストの関係の特異性と呼応している。上で提示した織物の表象系列は、分析対象であるテキストの内部と外部に同時に存在する精神分析のテキストの特異な位置取りを保証する。これによって、精神分析的読解という真理の開示プロセスと、その読解によって析出される真理は一致するのである。

アンデルセンのテキストはフロイトのテキストを舞台にかけて〔＝上演して〕いるのである——フロイトが、テキストは、例えばこの童話のテキストは、裸形の夢の裸形のひとつの *Einkleidung* であることを説明するとき。フロイトが「二次的加工」について口にすること(フロイトによる解明するテキスト)は解明されるテキスト(アンデルセンの童話)の中ですでに舞台にかけられ、あらかじめ表象＝上演されているのが見出されるのである。¹⁰

精神分析のテキストが文学テキストを上演するとき、当の文学テキストはそれに先立って精神分析のテキストを上演しているものとして現われる。この特異な関係への問い、それは無論テキスト＝織物(textile)への問いでもある。文学テキストはある「限定された(déterminé)」仕方で読解されることで、精神分析の真理を上演する装置として作動する。そしてその過程で、読解の規則を定めたフロイトの区分は反転され、真理はテキストという装置の、文学フィクションの作動の効果となるのである。

ここまでみてきたように、デリダが、フロイトによる文学への参照の在り方を分析しながら執拗に問題にしているのは、精神分析と文学のテキストにおける交錯と、そこでの真理の位置づけである。精神分析による文学読解において、読解するもの／読解されるものの区別は自明なものではなくなっている。この関係の複雑化は、読解において精神分析の真理が、精神分析の言説そのもの(上の例で言えば、裸形の夢の核心は、裸体が剥き出しになっているながらそれが他者の眼差しに対しては覆い隠されているという矛盾にこそ存する、というフロイトの分析)であると同時に、分析対象の文学フィクションの中のある形象(同じく、アンデルセンの描く皇帝の剥き出しの身体と愚かさ、それと一体になっている衣服)でもあるということに起因する。さらにデリダは、フロイトにおけるこうした問題をより広い射程で、つまり真理とテキストとの関係の問題として捉え、真理の裸形化／隠蔽をハイデガーの「アレーティアへの運動」と重ね合わせている¹¹。

ここにあるのは真理そのものの問題であると同時に、テキストそのもの、より厳密にはその形式性(formalité)と物質性(matérialité)の問題でもある。デリダがフロイトの文学読解とハイデガーの真理論を重ね合わせる結節点となっているのは、裸形とその隠蔽の一体性(unité)であり、この一体性を支えているのは織物の表象系列をなす語の連関に他ならなかった。フロイトのテキストにおいて、織物、衣服といったテキストの形象(〈テキスト)と語のレベルで緊密な関係を持っている諸々の形象)は真理の隠蔽を表象する(représenter)と同時に、隠蔽される真理を否定的に指し示すものでもある。ここでは、「二次的加工」でありその意味で仮象でしかない文学フィクションが、真理を上演する(représenter)装置となっている。

デリダはフロイトのテキストへの分析を、次のような問いで締めくくっている。「精神分析は自らを——それが見出すすべてを——、あるいは精神分析それ自身以上のものを、それが解読するテキストの中に見出す。真理についての、そしてテキストについての、この解読の諸帰結はどのようなものだろうか?そしてこの解読によって、われわれはどこへ連れてゆかれるのだろうか?」そして自らの問いを引き継いでこう書いている。「私はこの問題系の練り上げについて、今日、ジャック・ラカンが提起しているフロイトの読解に立ち寄るべきもので

あると考える。それも、私がここで用い得る空間内で、もっと限定して言うなら、『盗まれた手紙』についての「セミナー」に歩みを止めるべきであると¹²。

2. デリダによるラカン批判

私たちはここから、「真理の配達人」におけるデリダの「セミナー」の批判的読解を追っていくことにする。デリダは、ラカンの言説においても、精神分析と文学のテキスト上の交錯、そこでの真理とその隠蔽というモチーフを浮かび上がらせ、その脱構築を試みている。この試みの鍵となるのは、上で見出されたテキストの形式性と物質性である。まず、議論の前提として、ラカンがセミナーで取り上げている『盗まれた手紙』の概略を確認しよう。

『盗まれた手紙』には、六人の人物が登場する。それは王、王妃、大臣、警視総監、デュパン、そして語り手の「僕」である。物語は、王妃が何かから受け取った手紙が、大臣によって盗まれる、という事件をめぐって展開する。手紙は、王妃の部屋で、王と王妃の目の前で盗まれる。王はその場にいながら、事態には全く気がついていない。一方王妃は、大臣が手紙を盗むのを目の当たりにしていながら、それを阻止することができない。なぜなら、この手紙には、王には決して知られてはならない内容が書かれており（作中ではその具体的内容は最後まで明かされていない）、大臣の盗みを阻止すれば、その場にいる王がその手紙を見てしまうことになるからである。逆に言えば、大臣はその手紙が王に見られてはならないものであり、それが王妃の弱みになることをよく承知していたからこそ、王と王妃の眼前で堂々と手紙を盗んでのけたわけである。大臣はその時、偽物の手紙とすり替えて、王妃宛ての手紙を盗む。

この盗難をうけ、王妃は警視総監に極秘に捜査を依頼する。この捜査は、すでに事件の真相も犯人も明らかになっているところから始まる。目的はひとつ、件の手紙を大臣の手から奪還することである。しかし、留守中の大臣の部屋に侵入し、徹底した捜査を行ったにもかかわらず、警視総監は手紙を見つけることができない。そこで警視総監は、事態をデュパンに説明し、協力を求める。デュパンは、手紙を奪還したら王妃からの報酬の半分を受け取るという条件で警視総監に協力する。

デュパンは手紙を奪還すべく、二度大臣の部屋を訪れる。最初の一回で、デュパンは手紙を発見する。それはむき出しの状態で、しかし細工を施されて何の価値もない古びたもののように投げ出されている。しかしデュパンはその時は手紙には手を付けず、自分のシガレットケースを置いて大臣の部屋を後にする。これは二度目の訪問のための口実である。後日二度目の訪問のとき、大臣の注意が逸れた隙を狙って、デュパンは手紙を奪還する。彼はそこで偽物の手紙とすり替えて、王妃宛ての手紙を奪還する。この一部始終は、デュパンの友人ある「僕」が、伝聞のかたちで知り得た事実として、回想的に物語るものである。

ここで、議論のポイントを明確化するために、デリダによるラカン批判の論点を大きく三つに分けて整理しておこう。第一に、ラカンが(王妃→大臣→デュパン→王妃と)登場人物たちの手を移動してゆく手紙を解釈の中心にすえ、その移動を必然的な回帰の過程として描き出していること。第二に、ラカンがこの目的論的な回帰の運動を、その起源に適合したかたちでの真理の保証へと結びつけていること。そしてこれら二つの論点を結び合わせるものとして、第三に、ラカンの理論の中心的な概念装置である〈シニフィアン〉は脱物質化された超越論的なものであること。以下ではこの三点を、順を追ってみていくことにする。

2. 1. 回帰の順路設定

この物語を読解するにあたって、ラカンは手紙をシニフィアンとして捉え¹³、二つの三角形が反復される構造を導入する。手紙は、王と王妃がともにいる部屋の中で王妃から大臣によって盗まれ、王妃の依頼を受けた警視總監の捜査の目を逃れたあと、警視總監から事態を聞いたデュパンによって大臣から再度奪われ王妃の手に戻される。この五人の登場人物たちは、ラカンの『盗まれた手紙』読解においては二つの「間主体的＝相互主観的(inter-subjectif)」三角形の中に配置される。

第一の三角形は〈王 - 王妃 - 大臣〉、第二の三角形は〈警視總監 - 大臣 - デュパン〉という配置によって構成される。そして第二の三角形は、第一の三角形という「原場面(scène primitive)」の「反復(répétition)」である。これを図式的に示せ

ば以下のようになる。

〈原場面〉 1. 王 2. 王妃 3. 大臣

〈反復〉 1. 警視総監 2. 大臣 3. デュパン

ラカンが三つの項に配置される主体を眼差しの関係として以下のように整理している¹⁴。

第一の主体は何も見えていない眼差しのそれである——つまりこれは王、そして警視総監である。

第二の主体は、第一の眼差しが何も見えていないのを見ており、自分の隠しているものが覆い隠されているのを(第一の眼差しが)そこに見るよう
に欺かれているのを見ている眼差しの主体である——つまり王妃、そして大臣である。

第三の主体は、二つの眼差しから、それを奪おうとする者にとって剥き出しの状態、隠さなければならないものがそのままになっているのを見る眼差しの主体である——つまりこれは大臣、そして最後にデュパンである。¹⁵

問題なのは三つの項を占める具体的な人物ではなく、シニフィアン＝手紙の移動によって反復される三角形という構造そのものである。そこでの真の主体はシニフィアン＝手紙であり、登場人物たちはシニフィアン＝手紙に組み込まれたプログラムの中の項にすぎない。ラカンによる読解は、シニフィアンという装置、およびそれが操作子となって駆動する象徴的な構造を前景化させており、その意味では形式性に依拠したテキスト分析であることは明らかである。しかしデリダは、この三角形がラカンによるどのような操作によって可能になっているのかを分析し、その操作においてラカンが無視しているテキストの形式性の一般の問題を暴き出そうとする。そしてそうすることで、ラカンの言説がいかなる仕方であらうかにその真理を織り込んでいるのかを明らかにするのである。デリダはラカンによる読解に「悪しきフォルマリスム」を見出してい

る。

そのときなされるのは悪しきフォルマリズム (mauvais formalisme) である。フォルマリズムがなされるのは、もはや主体 - 作者に興味がないからであり、このことはある種の理論的状況の中ではひとつの進歩、それどころか正当な要求を形作ることもあり得る。しかしこのフォルマリズムが硬直した非一貫性を帯びるのは、作者を排除するという口実のもとに、もはや、1. 記述 - フィクションおよび記述者 - 虚構者 (ficteur) をも、2. 語りおよび語り手をも考慮しないときである。このフォルマリズムは、つねに、意味論的内容の密かな切り取りを保証しているのであり、精神分析はそこにその解釈作業全体を適用している。¹⁶

デリダの考えでは、ラカンによるテキスト読解において、形式性は一貫して重視されているわけではない。ラカンが『盗まれた手紙』から間主体的=相互主観的な三角形という超越論的な形式を引き出す際に決定的な仕方でも無視しているもの、それは小説というフィクションを成り立たせている形式性である。この形式性は、具体的には小説における記述、さらにはそこで設定されている語りの水準という形態をとって表れる。『盗まれた手紙』は、デュパンの友人である「僕」によって物語が語られる一人称小説である。仮にラカンによる読解に従って、この物語を二つの場面、二つの三角形に分けるとすれば、それらがどのような形式的回路を通じて読者に伝えられるのかを確認しよう。

第一の場面は、王妃の部屋で、王と王妃の眼前で手紙が大臣によって盗まれるというものである。王妃は大臣の行いに気づいているが、王の手前それを阻止することができない。この出来事は、王妃から警視総監に伝えられ、さらに警視総監からデュパンと語り手である「僕」に伝えられる。読者は、警視総監がデュパンと「僕」に事態を説明する場面の記述からこの出来事を知ることとなる。つまり、手紙が盗まれるという出来事のレベルを 0 とすれば、この出来事は 1. 王妃→警視総監への伝達 2. 警視総監から語り手への伝達 3. 語り手の視点からの 2 の場面の記述 (= テキストのレベル) というレベルの移行を経て読者に届いているのである。

第二の場面は、警視総監から事情を聞いたデュパンが、大臣の部屋に出向き、盗まれた手紙を大臣から密かに奪還するというものである。この出来事は、後日デュパン自身の口から語り手である「僕」に一部始終が伝えられる。読者はデュパンが「僕」に事の顛末を語って聞かせる場面の記述からこの出来事を知る。第一の場面と同様、手紙の奪還という出来事のレベルを0とすると、この出来事は1. デュパン→語り手への伝達 2. 語り手の視点からの1の場面の記述(=テキストのレベル)というレベルの移行を経て読者に届いている。

フィクションにおける語り、記述という観点から考えれば、ラカンが三角形の反復として構造化するふたつの出来事は、テキストが演出する形式的な多層性と不可分中たちで見出されるはずのものである。上の引用でデリダが指摘しているのは、『盗まれた手紙』という作品を成り立たせているこの形式的な多層性を、ラカンが不当に排除して読解しているということである¹⁷。上で確認したように、この多層性は出来事の伝達におけるレベルの移行として表れ、それをテキストのレベルへと送り返す記述上の転換子となるのが語り手の視点の介在なのである。ラカンはこの語り手の視点を排除したうえで、テキストのレベルから見れば異なる水準にある二つの出来事(手紙の盗難と奪還)を取り出し、それらをひとつの構造として直接接続している。以上を図式的に示せば以下のようなになる。

0. 手紙の盗難

1. 王妃から警視総監への伝達

2. 警視総監からデュパンへの伝達

3. 「僕」による語り→記述

0. 手紙の奪還

1. デュパンから「僕」への伝達

2. 「僕」による語り→記述

デリダが「意味論的内容の密かな切り取りを保証している」「悪しきフォルマリズム」と呼ぶのは、ラカンのこうした振る舞いを指してのことである。二つの出来事は、明らかに小説テキストの形式性の側ではなく、その形式性によって多層的に演出されたフィクションの意味内容(signifié)の側に属しており、ラカンはこの二つの出来事を「現実のドラマ(drame réel)」と呼んでいる¹⁸。しかしこれは、「一通の手紙の物語、一個のシニフィアンの盗難と移動の物語」の意味内

容であり、この「シニフィアンの移動は一個のシニフィエとして、一つの短編の中で物語られる対象として分析されている」¹⁹。ラカンがシニフィアンとその移動という形式的構造へと向かう瞬間は、テキストにおいてフィクションを成立させている形式性を排除する瞬間に他ならないのである。

2. 2. 真理の場，真理を知る者の場

ここからは、上で挙げた第二の論点、すなわち手紙＝シニフィアンの回帰と真理との関係に焦点を当てよう。まずラカンがセミナーで提示しようとする真理とはいかなるものなのかを確認する。

ひとつの物語において主体がひとつのシニフィアンが巡る経路から主要な決定を受け取ることを証明することで、私たちが今日あなたがたに例示(illustrer)しようと考えたのは、私たちが研究するフロイトの思考のあるモーメントから立ち現れてくる真理、つまり主体にとって構成的であるのは象徴的な秩序(l'ordre symbolique)であるという真理である。

私たちが指摘すること、それは、この真理こそがこのフィクションの存在そのものを可能にしているのだということである。²⁰

ラカンのこの言明において、真理は二重化されている。それはまずもって、フロイトの研究からラカンが立ち上げる象徴的なもの(le symbolique)の理論である。『盗まれた手紙』という作品は、象徴的なものというラカンの精神分析理論の言説を、間主体的＝相互主観的三角形という形態において示すための「例示」として用いられたのである。その意味で、精神分析とその真理は文学テキストの外部に位置することになる。さらに言えば、読解する精神分析のテキストは、読解される文学テキストに対して事後的に存在することになるはずである。

しかし、引用の二段落目の一文で、精神分析、真理、分析対象の文学テキストの関係が一義的には決定されないことが示されている。「この真理こそがこのフィクションの存在そのものを可能にしている」とはどういうことだろうか。もしラカンの語るように、その真理がフィクションの存在の可能性の条件である

とすれば、精神分析の真理は読解される文学テキストに先立って存在していることになる。仮にあるフィクションが、自らの存在の条件になっている真理の「例示」として表れるとすれば、そしてそれを可能にするのが精神分析による読解なのだとなれば、その位置関係は極めて複雑なものとならざるを得ないだろう。さらに、上で示した精神分析の、あるいはその真理の、文学テキストに対する事後性／先行性といった論点は、私たちがデリダとともに分析しているテキストにおける位置・場の問題が、空間性に限定されるものではなく、むしろ時間性と空間性を包含する、あるいはそうしたカテゴリーを基底的に支えている次元にあるものであることを示している。

ラカンは『エクリ』巻頭の序文で、『『盗まれた手紙』についてのセミナー』がこの論集において特権的に「範例的な(exemplaire)」位置にあることに言及している。そこには、「真理がフィクションに住まっている場合には、読者は自らが真理以上には見せかけの〔欺かれた〕ものではないと考えるだろう」と記されている²¹。真理との関係において、フロイトのテキストが文学テキストと複雑に交錯していることはすでに見たが、ラカンにおいてもそれは同様なのである。デリダは、ラカンのテキストにおける文学テキストの「例示的な位置」²²(強調原文)、およびそこでの真理の在り方について以下のように指摘する。

最も教育的な文学的例証がそれにしたがって組み立てられる真理、それはやがてみるように、しかしかの真理ではない、それは真理そのもの、真理の真理なのである。この真理はセミナーに厳密に哲学的な射程を与えている。

そのとき認められるのは最も古典的な実践である。哲学的「文学批評」の実践のみならず、またフロイトが、他の場所で他の仕方で扱っているひとつの知、ひとつの真理、そして諸法則のための例、例証、証言、確認等の数々を文学に求める、その都度フロイトが行っている実践である。他方、フィクションと真理の関係についてのラカンの言表が他の場所ではそれほど明瞭ではないにしても、ここでは序列には疑いの余地がない。「真理がフィクションに住まう」、これは何もフィクションが、自らに住まい、かつ自らのうちにそれが書き込んである真理よりも強力だといういささ

か倒錯的な意味に解されはしない。事実(en vérité)、真理(la vérité)がフィクションに住まうのは、家の主として、家の法として、フィクションの家政(économie)としてなのである。²³

精神分析の言説は、自らのうちに文学テキストを、あるいはそれが演出するフィクションを取り込み、「例示的な位置」を配分する。それは何よりも文学を真理に奉仕させるためである。この振る舞いが、ひそやかに真理とその隠蔽としてのフィクションの関係を転倒させることで成り立っていることは、フロイトの例ですでに確認した通りである。

ラカンの文学読解において導入される真理の二重性は、入れ子構造の中に設定されテキストを組織化する。それは一方では象徴的なもの、シニフィアンの理論であり、他方ではフィクションの中で手紙の移動こそが物語の動因を担っているという事態である。そして両者は、〈シニフィアン＝手紙〉という等式を前提とすることで理論とその例という単純な二項関係には区分けできないものとなっている。ラカンのテキストにおいて、両者は再帰的に、絶えず相互に送り返されるように組み上げられているのである。そしてこれから明らかになるように、ラカンによる、語り手が体現する記述と語りの水準の排除は、この組み上げのための操作上の要請によっているのである。この組み上げは、真理の上演においてセミナーとフィクションの舞台を一致させる。つまり、この操作によってラカンはセミナーを舞台とする精神分析の真理を文学フィクションの中に書き込んでおり、『盗まれた手紙』というフィクションの舞台には真理を知るものとしての精神分析家が登場することにさえなるのである。その分析家とは、すなわちデュパンのことである。

デリダは、ラカンがデュパンというフィクションにおける登場人物の一人を特権視し、その振る舞いに精神分析家のそれを重ね合わせていることを指摘する。上で確認したように、ラカンが『盗まれた手紙』から引き出す象徴的な構造は、二つの三角形が反復される形式的な運動によって展開され、第一の三角形は〈王 - 王妃 - 大臣〉、第二の三角形は〈警視総監 - 大臣 - デュパン〉という配置によって構成される。この物語において真の主体＝主題(sujet)が手紙＝シニフィアンであり、個々の登場人物たちは「シニフィアンが巡る経路」に配置される

項にすぎないのだとすれば、二つの三角形において相似的な位置を割り当てられるふたりの人物(王と警視總監／王妃と大臣／大臣とデュパン)は権利上まったく同等の立場に置かれるはずである。このことをラカンは「同一化(identification)」の問題として主題化しており、第二の場面で大臣は、第一の場面での王妃に同一化しているとされている(上の整理での二組の関係)²⁴。しかし三組目の関係、すなわち大臣とデュパンはラカンによる読解において極めて非対称的なものとなっており、デリダはこの点を問題視する。「最後にデュパンはこうして大臣への一時的な同一化を断ち切り、そうすることで回路から抜け出し、すべてを見てとる唯一の者としてとどまるだろう」²⁵。デュパンはなぜ大臣に同一化することなく、象徴的な構造から抜け出し、反復の運動を止めることができるのだろうか。ラカンはこの点を、デュパンが手紙を奪還することで得る報酬の機能として論じている。

デュパンにとっておそらく手紙の象徴的回路から自分自身が抜け出さねばならないとき、自分が関わり合いになっているとわたしたち〔精神分析家〕が思うのは実際当然のことではないだろうか——私たちは、転移において少なくとも一時の間わたしたちのところで受取人不明である(en souffrance)ことになる、すべての盗まれた手紙の密偵(les émissaires de toutes les lettres volées)になるのだから。そしてそれらの手紙の転移が含んでいる責任をこそ、私たちはあらゆる意味作用(signification)を無化するシニフィアン、つまりは金銭と等価にすることによって、中性化＝中立化する(neutralisations)のではないだろうか。²⁶

二つの三角形に配置される五人の人物の中で、ただひとりデュパンだけが、そこから自らが決定を受け取り構成されているところ構造、象徴的回路から自覚的に抜け出すことができる。それは彼が象徴的回路の中で起動する転移現象を無化する術を知っているからである。転移とは分析関係において重要な反復のモーメントのひとつであり、分析実践の中で一時的に形成される転移関係の終わりは、分析の終わりのための一つの指標となるものだと言えるだろう。重要なのは、ラカンによる読解において、デュパンは優れた精神分析家として

振る舞うことで明らかに三角形の外部へと踏み出しており、その意味で象徴的なものに対して二重の立場を取っているということである。そしてデュパンの立場の二重性ないし優越性は、上で述べた語り手としての「僕」の排除と連動し、その効果としてセミナーとフィクションの舞台を一致させているのである。

象徴的なものこそが主体を構成する、という精神分析の真理によって解読されたフィクションにおいて、デュパンはただひとりその真理を知る分析家となる。ラカンは語り手を排除することで象徴的な構造を前景化させつつ、その構造に対して能動的に振る舞うことができる唯一の主体としての分析家の形象を文学テキストの中へ書き込んでいるのである。ラカンのテキストにおける真理はこのようにして、セミナーの場とそこに「例示」として持ち込まれるフィクションの中に——それが「例示」であるにもかかわらず——同一のものとして表れる。精神分析家は文学テキストを読解していながら同時に読解されるテキストの中にも存在する。デュパンは手紙の移動が駆動する物語の中の登場人物のひとり、三角形の中のひとつの項であると同時に、象徴的回路、シニフィアンの理論を知り反復を終わらせることができる特権的な立場に立っているのである。

デュパン＝分析家は、フィクションを例にとるためにラカンが設けたものであるはずの〈手紙＝シニフィアン〉という等式を知っており、それを利用することができる。言い換えれば、ラカンは自らが文学作品の読解のために導入した規則を、さも当の作品の中の人物が既にそれを知っているかのように、作中に滑り込ませているのである。そして、ラカンによるこうした組み上げの、物語の舞台を設定するフィクションの形式的な水準、すなわち記述・語りの水準をめぐる操作として、デュパンを対象化する外部の視点、語り手である「僕」は排除されるのである。あたかも、真理の言説としての精神分析を対象化する外部の視点は、あり得ないものであるかのように。

デリダによれば、ラカンの象徴的なものをめぐる真理は、どんなことがあっても手紙がそこに回帰する場所、すなわち宛先としての王妃において形象化(figurer)されることとなる。ラカンは三角形の反復という構造において、デュパンによって手紙を奪還されるとき、大臣は(大臣自身によって手紙を盗まれた時の)王妃に同一化していることを示唆する。そしてこれを、ファルス(男根)

を持たないものである女性への同一化として、つまり去勢というテーマ系に位置付けて論じている。この点に関してデリダは以下のように述べている。

したがって手紙はひとつの固有の意味、固有の行程、固有の場を持つ。どのような？ ひとりデュパンだけが、この三角形の中にあってそれを知っているように見える。[……] 彼は何を知っているのか？ 手紙が最終的には見出される (*finalement se trouve*) ということ、それがその固有の場に循環的かつ適合的に回帰するためには、どこに見出されなければならない (*doit se trouver*) かということ、である。デュパンによって、またあとで見るように、揺れ動きつつも自らの位置を占めている精神分析家によって知られているこの場所とは、去勢の場である——ペニスの欠如をめぐるヴェールを剥がれた場としての、ファルス、すなわち去勢の真理としての女性である。盗まれた手紙の真理は真理そのものであり、その意味は意味そのものあり、その法は法そのもの、つまりロゴスにおける真理のそれ自身との契約である。²⁷ (強調原文)

シニフィアン＝手紙が固有の場を持ち、それがたったひとつの回路を経て確実に回帰するのは、まさしく真理の名においてだということになる。ここで王妃は、文字通りに (*à la lettre*) 王妃であることやめ、真理の形象とされている²⁸。手紙とは主体に欠如を穿つ特権的なシニフィアンとしてのファルスであり、三角形を形成する五人の中で唯一の女性であり手紙の宛先でもある王妃はまさしく特権的な欠如の場なのである。ラカンにおいてこの欠如が真理と結びつけられることは、デリダがフロイトの読解において指摘した、裸形としての真理とそれを覆い隠すヴェールとの一体性に正確に対応している。アンデルセンの描く愚かな王の裸が衣服に覆われることで逆説的に剥き出しにされるように、精神分析的な意味での女性において、ファルスはペニスの欠如という穴を埋めにやってくるヴェールであり、それを覆うことで逆説的に欠如を象徴化し指し示すのである。ラカンの読解は、王妃を真理の形象としての女性に仕立て上げることによって、セミナーで展開される言説を真理についての真理として組織化する。欠如という真理は、その隠蔽と一体化した暴露によって開示されるも

のである、という「真理そのもの」として。

2. 3. シニフィアンの物質性をめぐって

上で述べた、ラカンの読解における手紙＝シニフィアンの必然的な回帰の問題、ラカンの言説・分析対象の文学作品・真理の関係の問題は、ラカンが導入している手紙＝シニフィアンという等式にすでに孕まれていたものである。ラカンは文学テキストをシニフィアンの理論によって、かつシニフィアンの理論が書き込まれた物語として読んでいる。フランス語の‘lettre’は「手紙」と「文字」という意味を同時に含んでいる²⁹。ラカンの『盗まれた手紙』読解においては、手紙、文字、シニフィアンは基本的には同じものであり、それが作品全体を貫きながら物語を駆動しているとされている。こうした観点が形式性の問題を全面化させていることは疑いえないだろう³⁰。デリダの批判は、この手紙＝シニフィアンが、分割不可能な一体性を保持し続けることに向けられる。なぜならそれが、手紙＝シニフィアンの回帰、真理とその隠蔽の一致の、核心にある問題だからである。ラカンにおけるシニフィアン＝手紙の一体性は、第一にその特異な物質性として示される。デリダはこの点に関して、ラカンがセミナーにおいて以下のように述べている部分を参照する。

しかし、われわれがこだわった (*insisté*) のがまず何よりもシニフィアンの物質性 (*matérialité*) であるとすれば、この物質性は多くの点で特異であり、その第一の点は、部分に分けること (*partition*) に耐えないことである。[……] というのは、シニフィアンは唯一であることによって単位＝一体 (*unité*) なのであり、その本性からして、ひとつの不在の象徴 (*symbole*) でしかないからである。そしてそうであれば、盗まれた手紙について言えることは、他のモノと同様にそれはどこそこに在る、あるいは (*ou*) ないということではなくて、ほかのモノとは違って、それはどこへ行こうと、それは在るところに在りかつ (*et*) ないだろう、ということである。[……] というのは、文字通りに (*à la lettre*) それはその場所に欠けている (*manque à sa place*) と言いうるのは、場所を変えることがあり得るもの、すなわち象徴的なもの (*le symbolique*) についてのみだからである。³¹ (強調原文)

ラカン自身が認めるように、彼の定義するところのシニフィアン＝手紙とは、少なくとも私たちの経験的な見方からすればいさか奇妙なものである。シニフィアン＝手紙の物質性は分ち得ない「一体性」によって特徴づけられる。この一体性はシニフィアン＝手紙が「ひとつの不在(une absence)」との関係において「唯一(unique)」であることにこそ支えられている。そしてこの関係を、ラカンは象徴と呼ぶのである。その存在の有無が問われるとき、「他のモノ」が〈在るか／ないか〉という二律背反を構成するのに対して、象徴的關係は、〈在り／(同時に)ない〉という矛盾を孕んだ一体性を構成する。なぜそのようなことがあり得るのだろうか。それは、シニフィアン＝手紙が、つねにその在るべき場所と結びついたものであるからである。つまり、「シニフィアン＝手紙がない」と言われるとき、それはつねに「シニフィアン＝手紙がその場所に今はない」ということを意味するのである。この意味で、自らの場所との関係を内包したものであること、それがラカンの言う「象徴的なもの」の条件なのである。言い換えれば、シニフィアン＝手紙の不在とは、その存在(在ること)の否定としての非存在なのではなく、あるべき場所における不在、すなわち欠如なのである。

ここに見られるシニフィアン＝手紙における場所／欠如の論理について、デリダは以下のように指摘する。

手紙＝文字の問題、シニフィアンの物質性の問題——おそらく « *manque à sa place* » という言い回しにただの一文字(une lettre)、おそらくは一文字(une lettre)にも満たないものを変えるだけで、一個の a つまりアクサン記号のない a をそこに書き入れるだけで、次のことを現れさせるには十分だろう。すなわち、シニフィアンのこの原子単位の(atomistique)トポロジーの中に、欠如がその場を持つ « *le manque a sa place* » としても、それがこの特定の輪郭を持った決定されたひとつの場(un lieu déterminé)を占めるとしても、秩序は決して乱されはしなかったことになるだろう。文字＝手紙はつねにその固有の場(son lieu propre)を、一個の丸め込まれた欠如(確かに、経験的ではなくむしろ超越論的なそれである、その方がずっと好都合であり確実である)を再び見出すだろう。文字＝手紙はひとつの固有の=本来

の (*propre*)、そして本来的に循環的 (*proprement circulaire*) である行程の迂回路を通じて、侵し得ない、破壊し得ないものとして、それがつねに在ったであろう、つねに在らねばならなかつたであろう場に在るだろう。〔……〕ラカンはしたがって文字に、つまりはシニフィアンの物質性に注意深い。そしてまた、文字の原子の場 (*le lieu de l'atome littéral*) とまったく同様に、主体を決定するシニフィアンの形式性にも。³² (強調原文)

ラカンの文学読解における〈シニフィアン＝文字＝手紙〉という等式は、デリダによれば「超越論的な」欠如との関係においてのみ成り立ち機能するものである。ラカンのシニフィアン＝文字＝手紙は、つねにひとつの、固有の場所を持つ。そしてその欠如もまた、つねにひとつの、固有の場所を持っている。ラカンはそれを王妃という人物に措定し、王妃を唯一の宛先とする手紙＝シニフィアンを「場所を変えることがあり得るもの」と言い換えていた。この移動のプロセスを指してデリダは、「本来的に循環的である行程の迂回路 (*détour d'un trajet proprement circulaire*)」と呼んでいる。本来的に循環的であるということ、それは、シニフィアン＝文字＝手紙が必ず元在った場所に戻ってくるということである。だからどこへ行こうとも、それは結局のところ回帰 (*revenir*) の迂回路の一部にすぎない。そして重要なのは、この行程がたった「ひとつの固有の行程 (*un propre trajet*)」だということである。ラカンの読解においては、手紙には盗まれること、複数の主体の手を渡って最終的に戻ってくることは本来的なプログラムとして組み込まれているのであり、その意味で手紙はつねにすでに「盗まれた手紙」以外の何ものでもないのである。

こうした超越論的なプログラム——デリダの言葉によれば「決して乱されることのない」秩序——のもとにあつて、手紙は必然的に物質性を裏切り、言うなれば幽霊＝回帰するもの (*revenant*) のような性質を帯びることとなる。デリダに言わせれば、ラカンがシニフィアンの物質性に注意を払うのはこの幽霊性の裏返しに過ぎないのである。ラカンは手紙について、「ひとつの手紙を細かくちぎってみても、それがそれであるところの手紙 (*la lettre qu'elle est*) であり続けるだろう、それも、ゲシュタルト理論が全体の観念という潜在的なヴィタリズムによって説明し得るようなこととはまったく別の意味で」³³ と書いている。つま

りラカンにとって手紙の統一性＝単位(*unité*)はその物質的な支持体である紙のレベルとは無関係に成立しているのである。そうであればこそ、「あるのは手紙の保管(*détention*)であって所有(*propriété*)ではない」³⁴。ラカンは、「それを保管している者、と言っているのであって、それを所有している者、とは言っていない」³⁵。なぜなら、所有とは物質的な支持体を前提にしてのみ可能だからである。そして物質的な支持体から離脱して機能することこそが、手紙の在り／(同時に)ないという「特異」な「物質性」を支えているのである。

おわりに

ここまでみてきたように、デリダのラカン批判の核心には、シニフィアン概念が定義上、その物質性と矛盾をきたすという事態がある。この矛盾は、シニフィアンはその一体性を維持したまま、起源にあるたったひとつの欠如、真理の場所、たったひとつの宛先へと分かちがたく結び付けられていることの裏返しである。そしてこうした観点から、デリダはラカンのセミネールの末尾に語るテーゼに、異議を申し立てることになることになるのである。ラカンはこのセミネールを、次のように締めくくる。「したがって『盗まれた手紙』、さらに言えば『受取人不明の手紙』が言わんとする＝意味する(*veut dire*)のは、手紙はつねに宛先に届く、ということなのです」³⁶。これに対しデリダは次のように反論する。

手紙の残余の構造とは、セミネールがその最後の言葉として言っていること〔……〕とは反対に、手紙は宛先に届かないことがつねにあり得るということである。手紙の「物質性」、その「トポロジー」は、その分割可能性、つねに可能である分割に依拠している。手紙は取り返しもなく細分化されることがあり得るのであり、これこそが象徴的なもの、去勢、シニフィアン、真理、契約等々のシステムがつねに手紙をそれから守ろうと努めていることなのである。〔……〕手紙が決して宛先に届かないということではなく、届かないということがつねにあり得るということは手紙の構造に属しているのである。〔……〕ここでは散種(*dissémination*)が真理の契約とし

てのシニフィアンと去勢の法を脅かしているのである。それはシニフィアンすなわちファルスの一体性を傷つける (*entame*)。³⁷ (強調原文)

デリダは、ラカンが導入した超越論的なエコノミーを他ならぬシニフィアン＝手紙の物質性を介して反転させる。ここでラカンの特異な物質性は拒絶され、分割可能でつねに細分化や拡散の可能性にさらされたものとしての内在的な物質性がそれに對置される。この分割可能性は、特権的なシニフィアンとしてのファルスの超越論的な一体性に切断の契機を与える。

ここまでの検討によって、デリダがフロイトを脱構築することで見出したテキストの物質性と形式性の関係もまた明らかになるだろう。デリダがラカンの言説に見出すのは、内在的な物質性から切り離された超越論的な形式性である。それに対して、ラカンが排除しようとした(とデリダが考える)のは、そしてデリダの脱構築の条件となるのは、内在的な物質性から切り離すことができない形式性である。それは「言わんとする＝意味すること」の全体性から分割され得る、つまり意味作用の十全性に切断を導入し得るような形式性である。これは、デリダの「真理の配達人」における実践に直結している。ここでの脱構築とは、対象のテキスト(「セミナー」)から、書き手の戦略が徴候的に表れる諸概念(シニフィアン、手紙＝文字、物質性)を切り離し、そこにある書き込み(欠如の指定、真理の保証、真理を知る者としての分析家の登場)の痕跡を、つまりラカンの分析的読解の刻印を辿り直し反転させることで、テキストを保証されたひとつの意味から散種させる実践である。脱構築はテキストという場において、ラカンの理論的・実践的戦略素を横領する。それはラカンの理論が保持しようとする真理、そしてその真理の特権的な語り手であろうとするセミナーの実践に介入する。この介入によって、ラカンが自身の真理を保証するために用いた概念装置としてのシニフィアンは、デリダによって変形され散種されている。「真理の配達人」において、「『盗まれた手紙』についてのセミナー」が宛先に届けようとしていた真理の手紙は、脱構築によって再度盗まれる。盗まれた手紙 (*la lettre volée*) は、飛散する手紙 (*les lettres volantes*) となるのである。

註

1. 本稿は、国立オリンピック記念青少年総合センターで開催された2013年度哲学若手研究者フォーラムでの個人研究発表(2013年7月14日「デリダと精神分析——デリダのラカン批判を中心として——」)をもとに、質疑応答での議論などを踏まえ改稿を施したものである。
2. Jacques Derrida, 《Le facteur de la vérité》, in *La carte postale*, Flammarion, 1980. 以下註ではCPと略記する。邦訳「真理の配達人」清水正・豊崎光一訳、『現代思想』, 一九八二年二月臨時増刊号, ページについてはCP, p.441/19. のように原著/邦訳の順で記す。
3. Jacques Lacan, 《Le séminaire sur « La lettre volée » 》, in *Ecrits*, Seuil, 1966. 以下本文中では「セミナー」と、註ではEと略記する。
4. CP, p.441/19.
5. この無意識の文法について、フロイトはそれを圧縮・置き換え・呈示可能性への顧慮・二次的加工という四つの項目に類型化する。この四つの項目における加工を簡潔にまとめれば、1. 夢の潜在内容における観念の連合をまとめ上げ、2. 要素に対する心的強度を移動させることで内容におけるアクセントとなる要素を置き換え、3. それを視覚表象として呈示可能なものに組織し、4. まとまりを持ったある種の「物語」として精製する、というものである。デリダがここでまず問題視するのは、四つ目の「二次的加工」というプロセスである。
6. 更に付け加えれば、フロイトは幼年期の体験の中でも特に幼児の性欲動の抑圧に焦点を当てており、それを父殺し・近親相姦という精神分析的テーマへと接続させている。以下で言及する『オイディプス王』と『ハムレット』の分析は類型夢の一つである「近親者が死ぬ夢」についての議論の中で登場するものである。
7. この区別については、ジークムント・フロイト『夢解釈I』(フロイト全集4), 岩波書店, 二〇〇七年, 新宮一成訳を参照のこと。
8. デリダはこの転換を指摘しながら「フロイトはテキストのある襞(un pli)に、彼の言説を包み込むひとつの構造的な複雑化(une complication structurale)に少しも注意を払っていない。しかしその言説はそこにこそ見出されなければならないものなのである。」(CP, 446/24.)と述べている。デリダがここで提起する「複雑化」や「襞」(complicationは相互性、同時性、集合性を示す接頭辞‘co-’と襞‘pli’からなる語である)は、テキストの物質的次元での、全般的な差異化の運動のうちに見出される痕跡であるといえるだろう。それはまた、脱構築という戦略の根本的な条件でもある。
9. 言うまでもなく‘Einkleidung’は「裸体露出」の夢について説明する際にフロイトが用いる‘Entkleidung’と正確に対をなす語である。
10. CP, p.446/25.
11. CP, p.446/25. デリダは「真理の配達人」において、一貫して精神分析のテキストから引き出される真理の在り方にハイデガーの真理観との親近性を見出しており、こうした真理の問題にテキストや隠喩のそれが重ね合わされている。この「アレーティアの運動」としての真理については、ハイデガーの名著『存在と時間』の第44節(「現存在、開示態および真理性」)で議論が展開されている。ここではそれを本稿での議論に接続させるために最低限の概要を示しておく。ハイデガーは真理(Wahrheit)をめぐる議論を、伝統的な真理観への批判から開始している。その伝統的な真理観とはすなわち、「知性と事物の合致(adaequatio intellectus et rei)」として真理を規定するものである。ハイデガ

一の考えによれば、この真理観は認識の真理性が保証される条件を示すものであるが、そこでは真理概念を二重化する契機が前提とされている。認識の真とはすなわち判断の真であり、この判断を成り立たせるのは〈判断する〉という実在的な過程と、判断された理念的な内容というふたつの別々の次元である。しかしこの(伝統的な)真理観はそこから後者を取り出し、前者を不問に付してしまっている。ハイデガーはこの真理観を乗り越えるべく、判断をめぐる実在的過程と理念的内容という区別そのものが意味をなさなくなるような水準で真理を問うことを試みる。それは真理を存在論的に分析し、真理の存在(在る／ない)と本質(真理とは何か)をひとつのものとして現象学的に把握することに他ならない。このような仕方では問われることで、真理は存在を問う存在者としての現存在との関係において規定されることとなる。「アレーテア＝覆い隠されていないこと」とはこのような意味での真理の存在様式、あるいは真理の可能性の条件なのである。ハイデガーはそれを、現存在の判断の言明が「発見的であること(entdeckend-sein)」によって言明される存在者が「覆い隠されていないこと(Unverborgenheit)」であるとしている。本稿の議論にとって重要なのはこうした真理の在り方が欠如の表現(否定の接頭辞＋隠蔽・覆い)で語られていることであり、この点でデリダが読解する精神分析のテキストの真理と共鳴するものである(マルティン・ハイデガー『存在と時間』上巻、細谷貞雄訳、ちくま学芸文庫、一九九四年、四四三-四七六項)。

¹² CP, p.448/27.

¹³ この手紙＝シニフィアンという等式は、デリダのラカン批判の核心にあるものである。このことは後に詳細に論じる。

¹⁴ E, p.12.

¹⁵ E, p.15.

¹⁶ CP, p.460/42.

¹⁷ ラカンはこの多層性に言及しており(E, p.18)、それを十分に自覚しながら考慮に入れていないとするのがデリダの主張である。

¹⁸ E, p.18.

¹⁹ CP, p.455/36.

²⁰ E, p.12.

²¹ E, p.10.

²² CP, p.453/33.

²³ CP, p.454/34.

²⁴ E, p.34.

²⁵ CP, p.477/64.

²⁶ E, p.37.

²⁷ CP, p.52/467.

²⁸ CP, p.55/470.

²⁹ これはフロイト、ラカンが自身の精神分析理論の中で無意識の機制を取り上げる際に、文字に大きな意義を見出していることも呼応する。典型的な例を上げるならば、フロイトの機知や名前の度忘れに関する議論では、意味から切り離された文字あるいは音素のレベルでの近接関係、結合関係が非常に重要な役割を果たしており、ラカンも57年11月のセミナーでこれに着目し、自身のシニフィアンの理論を結び付けた議論を展開している(ちなみにラカンは同年5月に、『エクリ』に収められることになる論文「無意識における文字の審級、あるいはフロイト以後の理性(‘L’instance de la lettre dans l’inconscient, ou la raison depuis Freud’)」を書いている)。この議論がなされたセミナーは『盗まれた手紙』についてのセミナー(1955年に口述されたものが56年にテクス

トとして書き起こされ、57年に発表されている)と時期的にも重複しているものであり、本稿の議論にとって非常に示唆的なものである。Jacques Lacan, *Le séminaire, livre V : Les formations de l'inconscient*, texte établi par Jacques-Allain Miller, Seuil, 1998 (ジャック・ラカン『無意識の形成物(上)』, 佐々木孝次ほか訳, 岩波書店, 二〇〇七年)を参照のこと。

³⁰ 基本的な事項を確認しておく。ラカンのシニフィアンという概念装置はフェルディナン・ド・ソシュールから援用されたものであるが、両者がシニフィアンに付与した機能は相当程度異なっている。しかしそうした差異を孕みつつ両者のシニフィアンの機能に共通して見出される特性が、まさしく形式性であると言うことができる。ソシュールはシニフィアンを聴覚イメージ(*image acoustique*)と、シニフィエを概念(*concept*)と規定し、両者が恣意的に結びついて記号(*signe*)という単位を形成するとした。そこでなされているのは記号の機能をそれが指示する対象(*referent*)から切り離し、潜在的系列としての連合関係(*rapport associative*)／顕在的系列としての連辞関係(*rapport syntagmatique*)という二つの配列様式において捉えることである。こうした言語観はロマン・ヤコブソンを経由してラカンへと流れ込むが、ラカンはソシュールにおいて表裏一体の関係にあったシニフィアン／シニフィエの対応関係を切り離し、両者の間に相互に浸透し得ない抵抗の関係を見出すことになる。その際、ソシュールの連合(*association*)／連辞(*syntagme*)という区分をヤコブソンが応用した二つの配列様式、すなわち類似性(*similarity*)／近接性(*contiguity*)、選択(*selection*)／結合(*combination*)、代置(*substitution*)／共起(*contexture*)、隠喩／換喩などが踏まえられており、ラカンはこうした区分における後者の関係をシニフィアンの連鎖として自身の(特に50年代の)理論に中心に据えている。付け加えれば、ラカンは意味作用(*signification*)の「可能な用法の集合(*l'ensemble de ses emplois possibles*)」という定義をエミール・バンヴェニストから借りている。もちろん、ラカンの議論をこうした言語学上の系譜上に還元することはできず、あくまでラカンによるフロイト読解と理論形成のための独自の応用として考えられるべきである。ソシュールのシニフィアンとラカンのその異同の詳細に関しては Philippe Lacoue-Labarthe & Jean-Luc Nancy, *Le titre de la lettre*, Galilée, 1973 を参照のこと。バンヴェニストのラカンへの影響については原和之『ラカン 哲学空間のエクソダス』, 講談社, 二〇〇二年に詳しい。

³¹ E, pp.24-25.

³² CP, p.453/32. デリダがここで提示するのは、ラカンのシニフィアン＝手紙の物質性の問題が、シニフィアン、さらにはエクリチュールの物質性を構成する最小単位としての文字の問題と重なり合っていることである。‘*lettre*’が手紙と文字を同時に意味し、ラカンの文字とシニフィアンを同一視していることはすでに確認したが、デリダはこの同一性が孕んでいる微妙なズレを見逃していない。デリダが示唆するシニフィアンと文字とのズレ、そこでの物質性の問題は、言語表記一般をそのうちに収める広い射程で考えられるべきものであると言える。確かにシニフィアンがその物質的な支持体としての文字から構成されているということには、異論の余地はないだろう。しかしそのことは、〈シニフィアン＝文字〉という等式を即座に許容するのだろうか。ラカンが手紙(*lettre*)という文学作品の中のひとつの形象(*figure*)をシニフィアンと同一視したとき、この問いは密やかに宙吊りにされてしまうように思われる。そして、すでに上でみたように、文字という物質的な支持体を結節点として、ラカンは巧妙に、『盗まれた手紙』という作品の中に自身の精神分析理論の真理を書き込むことさえしているの

³³ E, p.24.

^{34.} *CP*, p.450/29.

^{35.} *E*, p.28.

^{36.} *E*, p.41.

^{37.} *CP*, p.472/58–59.